

# 講演

## 黒井 健氏講演 「絵本の挿絵について」

第五回 お茶の水女子大学ECCOPIA「子ども学シンポジウム

(1991年6月23日)から

(構成／菊地知子)

### 二度同じ作品を描いた挿絵の対比

ご紹介いただいた黒井健です。黒井健は本名です。今日は、「絵本の挿絵について」と題して話をさせていただきます。

私が挿絵を添えさせてもらった本は、三百冊ぐら  
いありますし、その中で、最も版を重ねてもう百万  
部に近いのが、『手ぶくろを買いに』<sup>注1</sup>という本です。  
一九八八年に出ました。実はその十年前に、私も忘  
れていたのですが、「手ぶくろを買いに」を一度描い  
ておりました。他にも、時を変えて二度、同じ本の  
挿絵を描いたということが幾度となくあるので、そ

の対比から入っていきたいと思います。

最初に「かさじぞう」。一〇〇五年<sup>注2</sup>と一九九五年<sup>注3</sup>と

に描かれた絵本があります。お気付きの方があるか  
と思うんですが、先に描かれたものは、どのお地蔵  
様も錫杖<sup>ひっじょう</sup>を持っています。後に描いたものは、一番  
左端のお地蔵様だけが錫杖を持つていて、他のお地  
蔵様は玉やお数珠などいろんなものを持っています。  
ただただ合掌しているお地蔵様もあります。どうし  
てこうなったのか。一九九五年の段階で私は、六地  
蔵という言葉に関する何も反応せず、ただ六体あれ  
ばいいと思つていました。一〇〇五年の時に初めて  
「あれ?」と思いました。それで編集の方に「六地

蔵って何か意味があるの?」と聞いたら、「あると思  
います」と。二〇〇五年というのはもうすでにパソ  
コンで検索ができた時代でしたので、すぐに検索を  
して、萩窪の方のお寺に取材に参りました。その時  
に初めて、慈悲の違いを表したもののが六地蔵である  
ことに気が付いて、六体それぞれに持ち物の違うお  
地蔵様を描きました。作家や編集者がその作品とど  
のように付き合うかによつて物語の解釈が変わり、  
表し方が変わるという一つの例です。

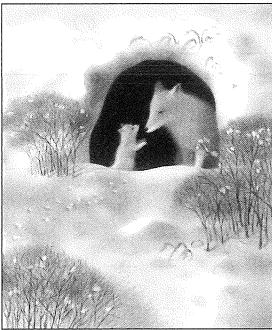
そして「手ぶくろを買いに」です。これは、新美  
南吉さんが二十歳の時に書かれた作品で、その時代  
(一九三〇年代)の帽子屋さんをどこに設定するか  
でずいぶん悩みました。調べてみると、お友達が残  
した随筆の中に、彼が東京外国语学校に通っていた  
ころの話があり、神保町で本を見て歩いて遊んだり  
文学論を交わしたりしていた、という記述があつた  
ので、神保町を取材しました。現在の神保町は区画  
整理が終わっていて当時の様子とは違いますが、戦  
災に逢わないで大正モダンに近い建物が残つていま  
す。

したので、それを取材しながら描いたのが一九八八年版の『手ぶくろを買いに』です。

その十年前、一九七七年にも「手ぶくろを買いに」  
の挿絵を、保育月刊誌に描きました。当時の私は、  
外国のデザイン的な作家さんにあこがれていました  
ので、三角形を基にして重ねていつてデザインする  
ような、積み立て構造で描いていました。こぎつね  
が初めて雪を見て「まぶしいよ」というような、  
光が重要であるはずのシーンでも、あまり光や陰影  
を気にしない描き方をしています。保育月刊誌では  
当時、シンプルな形と明るい色合いというものが常  
に求められておりましたので、それに沿つて描いた  
のだろうと思います。

初めて雪の中を歩いたこぎつねが「お母ちゃん手  
がちんちんするよ」と言うシーン。一九七七年版の  
絵では、おててがちんちんしていますが、一九八八年  
のものでは、文章で十分書かれていて感じ取れる  
ことなので描いていない。文と絵というのは、ピア  
ノとバイオリンの二重奏のようなものかもしだれず、

両方が同じ旋律を奏でても意味がない。つかず離れずその曲を演奏していく、というのに近いものではないかと、私は一九八八年の時に思つていました。



▲『手ぶくろを買いに』  
(新美南吉 作 / 黒井健 絵  
偕成社 1988年) より



▲『チャイルドブック 1977年度2月号』  
(チャイルド本社) より

保育月刊誌の中には絵を読み取るという要素があつたため、一九七七年には、物語に書かれているより細かく、例えば、冬の寝床を暖かくするための落ち葉や、鮭さけをつるして保管してあるような様子を、絵を読み取るためのサービスとして描き込みました。

それから帽子屋さんのシーンでは、一九八八年には、戦前に神保町でもし帽子屋さんをやつていたらどうなるだろうと考え、ちょっと日本人離れしたおしゃれな帽子屋さんをデザインしました。その十年前には、そういう発想をしなかつた。かわいく面白くすることを考えていたんだろうと思います。保育月刊誌として、読み取るための絵を期待されますから、置いてある小物や品物の彩りなど、読み取りのためのいろんなことがサービスとして描かれている。帽子屋さんもかなりひょうきんな感じに、明るい書き方というのを目指して描きました。

物語の本質みたいなものを読むようになつて、同じ作家の描いたものと思えないといふくらい、絵の表情とか雰囲気が変わりました。

### 絵の変化へのプロセス

私が初めて絵本に出会ったのは、学習研究社の絵本編集室でした。そこで保育月刊誌の編集者として従事していました。本当は一生勤めるつもりでいた

んですけれども、どうしても自分で一日じゅう絵を描いていたくなつて、二年ほどで辞めてしまつた。辞めた後も、学研の先輩たちや同僚たちが、生活が大変だらうからといろんな仕事をさせてくださつた。それがワークブックのイラストの仕事です。この仕事で、何が描かれているのか誰が見てもわかるように描く、といった経験をして、本当にモノをよく見て、どうやって描こうかを悩んで、ずいぶん勉強になりました。

戦前または戦後まもなくは、洋画家さんなり日本画家さんが絵本にずいぶん立派な絵を添えておりまして、むしろ大人っぽい時代がずっと続いていましたが、絵本らしい絵、というのが、マーケットでそれなりに評価を得ていく時代になつていきました。おかしな言い方ですが、いつの間にか私にもかわいい絵が描けてくるようになり、正直言いますと、そのかわいさにだんだん疲れ切つていきます。

もつとも、今でもその時のかわいさが続いているものも一つあります。ころわんシリーズ<sup>注4</sup>です。これ

は現在27冊目ですかね。全部が全部、増刊されているわけではありませんが、悩みながら描いてきたかわいさの続いている唯一のシリーズです。ころわんは、かわいいって皆さんよくおっしゃるんですが、ある方が、「でもすつごいバスですよね、バスでかわいいんですよね」っておっしゃる。そして私の顔を見てくすくすと笑う。どうも私がころわんに似てたらしい。顔立ちのいい、かわいい顔、っていうのと、造作がかわいくないのに、例えばこう、ちょっとした目がかわいいとかいうのがありますよね。私がころわんの中で見いだしていこうとしたのは、たぶんそういう存在のかわいさだったんではないか。人間の赤ちゃんでも動物の赤ちゃんでも、ほんとよくできますよね、かわいがるように。それは存在のかわいさにほかならない。たぶん保護を必要とする時に、ほんとに大事な要素ではないかなと思います。そういうかわいさが描けないだらうかと続いてきたのが、ころわんなんです。

仕事はおかげさまで本当に忙しく、暇のない、時

間のない日々になつて、ある年、年間16冊出版したんですよ、自分が絵を添えた本を。その年の暮れになつて、銀座の教文館に、自分の本があるかなと思つて見に行つたら、平台にはまず無かつた。じゃあ、棚ざしにあるかなと行つたら、一冊も無い。自分の描いた本が一冊も本屋さんに無いということは、どういうことなんだろうか。ころわんを描くようになつたそのころが、自分の本が読まれてないことへの疑問がだんだんに出て、絵本に向いてないんではないだろうかと思い始めたころです。

### 「じんぎつねとの出会い

その絶望感が、絵が変わつていくきつかけになり、先程ご紹介した「手ぶくろを買いに」を描く二年前に、「じんぎつね」と出会つていくんです。

それまでは、いたずらをしてその罰ばちが当たつて撃たれて死んでしまつたという、大変シンプルな理解をしてたんですが、読んだ時そういう心の状態でしたので、まったくそうではなく、驚きの連続だった。

それではまず、生まれ故郷に出かけていつて写真を撮つきました。車で行つてそこに降り立つ時に、非常に不思議な、何かに包み込まれるような感覚がありました。私はそこで三日間ほど、スケッチをしないで、その場の空気を吸い、ぼーっと過ごしました。彼が半月ほどいた養子先や生家が、現在もきれいに保存されていて、そこで彼の思いみたいなものを伝記で読みながら、まあ文学散步に近いことをして帰

つてきて、少しずつスケッチを描き始めていきます。

それまでは、絵本を作るプランを立てて、そのプランに沿って全体の展開、大道具小道具、それから情景も考えていったのですが、この絵本の時は私はすべての手法を失つてましたので、それをしなかつた。できなかつたといったほうが正解でしょうか。だからなのか、「作った」というより「生まれた」と表現できるような絵本になりました。これを描いて誰にも読んでもらえないなら、絵本をやめようと思つて描き上げました。



▲『ごんぎつね』  
(新美南吉 作 / 黒井健 絵  
偕成社 1986年) 表紙

に入っています。

で、常に、この絵を超えたいたい、というライバルになつてまして、いまだに超えられないっていうんですか、昔の、良い時代の私の絵なのかもしません。 —後略—

ここではお話を聞く一部しか掲載できませんでしたが、お茶の水女子大学ECCELでは現在、子ども学シンポジウムの講演録「子ども学ブックレット」を順次発行しており、黒井さんのご講演もブックレット化を予定しています。

#### 1 注

『手ぶくろをかいに』 新美南吉 作 / 黒井健 絵 偕成社  
一九八八年

『かさじぞう』 松谷みよ子 文 / 黒井健 絵 童心社  
二〇〇六年

『かさじぞう』 間所ひさこ 文 / 黒井健 絵 講談社  
一九九六年

『ころわんシリーズ』 間所ひさこ 作 / 黒井健 絵  
ひさかだチャイルド  
一九九六年

私が一番気に入っているのは、この表紙絵なんですね。このまなざしであつたり、全体の体の姿勢であつたりが、自分が描いたと思えないくらい、今でも気

\* 本講演で黒井氏が語られた内容は、氏の作品の制作過程のお話のため、実際の絵本の発行年と違つているものもあります。